

所謂「新漢音」に就きて若干

高 松 政 雄

- 一 序―「新漢音」の Orientierung に就きて
- 二 次濁声母に就きて―其処に Entnasalisierung の極を見る
- 三 曾撰陽類の韻母に就きて―そのイ段音仮名書き音形は実際的には長呼形なるべし

一

抑々、所謂「新漢音」なるものは、実は便宜的なる呼称であって、それ自体、一つの体系化された、その意味で、専門術語の対象となるべき内実を具有せるものではない。言うなれば、尋常の中古漢音体系の枠組みよりは少しくはみ出す事のある、その新しき要素のみに焦点を合わせるところの呼び名でしか、それはなきのである。この点に關しては、蓋し、古来、注目され来たれるが如くであって、例えば、本居宣長の左の言は、その典型的なものであるだろう。即ち、曰く『漢字三音考』――原文の片仮名は平仮名に直す。但し、字音形は片仮名の儘、

仏家の古き宗門に伝へたる一種の漢音と言ふは、乗勝称證等をシの音とし、応をイ、行をケイ、進をシイとし、また入声の一をイ、十をシなどとして韻を省ける多く、或いは白をハキ、国をケキともし、また極樂をキラク、

釈迦をセキヤなどと呼ぶ。此くの如く尋常の音と異なる者、凡そ数十字あり。…件の音、尋常の此方の字音と異なる者は僅かに数十字に過ぎずして、其の余は常の如く…

と。なお、別には『字音仮字用格』、

云雲（ウン）などを天台宗などに昔より漢音の時は、エンと読む。

の如くとも記す。斯かる捕捉法はまた中世にまで溯つて、例えば、『韻鏡字相伝口授・指微韻鏡序聞書』（六地藏寺本）左の表記法も亦、宣長の場合に準ずる）に、

「明」―俗書の漢音にはメイと言ふ。阿弥陀經懺法等の漢音にはベイと言ふ。

等と見出だされるのである。斯くして近代に入つては、如上の線を宛らに継承するばかりに留まる。この辺の消息に關しては、近時の沼本克明の整理の如くであるⁱⁱ⁾。但し、その事の渦中にあるはずの平安時代、別してはその後半期に於けるこの音形を採用するその位相にあつては、これは只管に「漢音」とのみ意識されていて当然である。自らがその登場人物たる以上は、その自らの眞の姿は遂に客觀視し得ぬが故にである。その実相の把握には、やはり相應の時間の経過を介在させねばならぬのである。

ところで、斯くの如きであるものを、一度、我が国漢字音史上にて位置付けてみるに、その一種の過渡的段階 Jōergangs-stadium の産物たるは、今更に言を俟つまでもなき事となる。それは、我が漢字音全般を相覆う、極めて生産的な漢音が、既に形成し得る事となり果せる後の、或種の、或範圍内での音形にこれが留まり、しかも、それらとて、やがて久しからずして中世唐音に吸収され行くの運命下にありしが故にである。因りて、一般社会内には一向に浸透、普及する事もなくしてこれは終始する。その意味では、或いはこの「新漢音」なる名乗り自体にもおこがましき感の無きしもあらずではあろう。しかしながら、仮令、如何にその音形が過渡期的であらうとも、これが、我が方の、主として天台、真言声明界に伝承・保存されて來たれるは、その彼土の音の Japonisierung という面

にて、換言せば、das Sinojapanische の歴史の一端を窺見せしめるものとして、反面、また甚だ有意義なる存在たる
とも解し得ようのである。されば、右の如き専門的な観点よりしてはやはりこれには相応の応待が必須である道理で
ある。茲に今、それに正対するの所以が存する。が、さりとて、差し当たり本稿でそれを全面的に精査する心算はな
い。それは、諸家の既発表の論に相譲って、目下は、最も私の関心事たる二点に限って攻究せんとするのである。

なお付帶的に言い置くに、当「新漢音」のその Orientierung に就きては、曾て言及せし事があるが如くである。
再録せば、それは、また、「過渡期唐音」に連続するものである。(拙著『日本漢字音の研究』第五章四―原題名、漢
字音史上の一断面―中古字音より鎌倉唐音へ―)。

二

さて、「新漢音」の特徴的な仮名書き音形は、前記、沼本に依って(註1論文、また、『日本漢字音の歴史』)、声母に関
して一、韻母に関して八、計九項目として纏められている。それは、大略これにて尽きる事と思われるが、今一つ、
宣長の引く(前述)文韻の「イン」形は、付加して置くべきものである。さすれば、江戸期に於ける伝統的な声明家
宗淵の指摘するところ等(『法華經安樂行品』吳漢両音)も全て、右の範囲内に包含せしめられる事となる。として、そ
れらは、かなり個別論上の対象となるものの如くであるが(先に宣長の言う「数十字」というのも、このレベルに於けるも
のである^(a))、一般論的に見て或統制を見せるのは、その声母上、韻母上で、それぞれ一点ずつと思しきのである。そ
れは、一は次濁声母―就中に、明・泥母―の Entnasalisierung の形であり、他は、曾撰韻母―特に、陽類―の新形で
ある。

ところで、我が方での拠り所となる彼土原音のあり様は、例の、唐五代西北方音を示唆するチベット資料に徴して

明かであり、それに、それが本来の切韻（広韻）音と如何程の距離を来たせしものなるかも亦、容易に知り得るところと現今ではなっている。その兩者の対比から、これを仮名書き音形に置換してみて、我がその「新漢音」の音形も亦、計測可能の事なのである。それに依拠してみれば、その特徴的な音形は、やはり、右に挙げられる10前後の項目のところに自然に落着するが如くとなる。この点で、逆にこれらの音形の、既に諸家の言う彼土晩唐の音の宛らの投影なる事が愈々不動に肯なわれるのである。さるものの中での当面の二点である。

先ず最初に、その次濁声母の、こちら側に於ける濁音での顕現現象に就きて述べるに、これは殆ど徹底的に行われるが如くである。因って、それは、その鼻音声母の *Entnasalierung* の極を示すものとなる。一体に、この現象自体は、その時点に於ける彼土の当該地方の特徴の一に属するものである。しかも、それは、当の本国人よりは寧ろ異国の人の耳に判然と把握される体のものであった。何者、前者にとっては、それは音韻的には一括されるものの、音声的なる *Allophon* としての実現としてしか感ぜられぬのに対して、後者にとっては、それは、さに非ざる、音韻的にも別のものとして聴取されたが故にである。茲に基づけば、我が仮名で、これは最早、鼻音（マ・ナ行音）で表す事は不可である。必然、濁音（バ・ダ行音）で表せざるを得ぬ仕儀に至れるのである。しかしながら、一旦茲で或いは疑問が生ずるやも知れぬ。それは、この声明、即ち、梵唄——つまり、一種の仏教儀式上の古典音楽——たるの本質に鑑みる時、それ故にの或統一がこの間には存するに非ざるか、と。然かり、それは一途には否定し得ぬところである。これは決して日常的なるものではない。その節回し、調子等に支配される事のあつて一向に不思議ではない（現に、挿入音も認められるし、連声等も惹起している）。されど、仮りにそうであるにしても、それが、当面、濁音の方で代表されているのは、現実的にそれが有力であつたが故にである、と解さねばなるまい。それに、若しも、茲に一つの統制を考えるのならば、それは、この「新漢音」の全般を相覆うものでなければならぬ。唯一つの面のみそれが限定されるいわれは断じてない。しかも、全般的には当「新漢音」は、既述の如くに寧ろ個別的な表れ方をしているものである。

る。されば、強ちに茲にて、或種の人為的細工を想定する事は、これを放擲して可なりと言ひ得るのである。

斯くて茲に、この次濁声母の、遂に行き着けるその終点が見極められる事となるが、これを基準とせば、其処に至るまでの、我が漢音の實際情況も亦、彷彿たらしめ得るのである。その動向は、蓋し既に言われておるが如くであつて、それ式に従えば、その韻尾の陰類入類である場合の方から早く進行して、最後にはその陽類の方にまで波及し、結局、その段階にては、最早、韻尾には無關係に、一斉に有声破裂音化せる、というその如き線が描かれる。これは極めて合理的なところである。そして、これが單なる理論にはあらず、恐らくやはりその現実語音を *realistisch* に反映するものたりしのであらう。かのチベット資料からも其処まで推して行き得る。

それにまた、例えば、彼土の尉遲治平の論説も、如上を支持するに資するものの如くである。これに関して今少しく敷衍して述べるに、中国では、日訳漢音・呉音、つまり、我が漢字音をば外国資料として援用し、以て自国の音韻史考察のための有力なる参考とする事が折々行われているが、右の尉遲のも、さるものの一に属するものである。当面彼の闡明せんとする問題には二つの事があり、その一は、隋唐長安音と洛陽音の声母の系統の事であり、二は、中国語鼻濁音声母の歴史に関する事であるが⁽⁹⁾、その何れにても、中に、我が「新漢音」が例証として引かれて、極めて重要な役割を演ぜしめられておるのである。これは甚だ興味深く、且、価値高きものたるが故に、その箇所を少しく引用し置く事とするに、その発端は左の如きである。即ち、

公元九世紀以后、中国仏教天台宗真言宗東伝、日本出現了新漢音。新漢音中、明・泥両紐の鼻韻尾字也分別読為濁塞音 b d。如明紐字「萌」読バウ bau、泥紐字「南」読ダン dan。^(補)

と。無論、筆者は、この以前の「漢音」の事情は先刻承知の上である。そして、茲に至れるその経緯中に、「天竺」の善无畏、金剛智、不空の「印度密教」翻經の事績に言及し、それと、慧琳の対音との一致を証した後で、結論的に曰く、

日(本)天台宗初祖伝教大師最澄、所伝台密重胎藏部、属善无畏一系。而真言宗初祖弘法大師空海、從不空弟子慧果受两部大法、于東寺伝東密、則新漢音実与不空学派対音有淵源關係。這充分説明長安音的次濁字的讀音經歷過一箇發展過程。

と。そして、以上になお付加して、12世紀末の西夏人骨勒茂才の『番漢合時掌中珠』(1190年)中の次濁字の対訳実態を挙げて、その説の強化に力めるのである。因みに、其処では、その次濁音に対する *Allophon* として、輕(西夏鼻音)、重(濁塞音)なる注を付すと言う⁶⁾。

無論、右の尉遲の主眼目は、我が「新漢音」の上に置かれているものにてはなきが、当面の問題に関して言及されている限りでは、殆ど正鵠を得たものである。但し、現今、「新漢音」出来に就いて普通に結び付けられているのは、慈覺大師円仁であつて、彼は、右の天台宗の開祖最澄の弟子である。が、右では、「新漢音」の将来者の事が云為されているものではなくして、その淵源關係に筆が及んでいるのみであるが故に、これは決して何も矛盾するところなきものではある⁷⁾。斯くして、この如きの支援の下にても、この声母の事は十分に信服し得るところとなる次第である。

三

次は、曾撰の鼻音韻尾に関してである。その入声韻尾は、これは他の韻撰のものと等し並みに、彼土原音の消失に向かう、その弱化的傾向を漸次露わに示すものとして、その過渡期的な音形は、一往それらしく解し得るに對し、この陽類の方の我が音形には、一思案を要するものがあると思しきのである。その所以は左の如きところにある。即ち、この曾撰韻尾は、その中国原音にては未だ弱化しておらぬはずなのに反して、それがこちらでは失落せしが如き仮名

書き音形で以て登場するのが一般であるからである。具体的には、既出の宣長の例の如きを指す（乗勝称證ン 応イ）。しかも、これは、恐らくその当初よりしてその如きであつたろう事は、例えば、沼本の新たに引く古点本資料に徴しても明らかである⁹⁾。そして、爾後、この形は、いわば「新漢音」専用の trade mark となり果せる。つまり、この直後の私の言う過渡期唐音でも、清規類でも、はたまた中世唐音でも、これは全て i- 形を採るところとなつておるのであつて、目下の如くに、そのイ段仮名のみで表せられるのは、他に例無き事なのである。されば、これは一体如何に解せられる事なるか。

これに答える前に、先ずその周辺の事実を押さえて置かねばならぬ。―さて、往時の中国唐五代西北方音にて、その鼻音韻尾の消失するは、右撰と梗撰とに限られる。これがまた当該地域の特殊なる現象であつたのだが¹⁰⁾、この中、我々が方には、この後者、梗撰の弱化せる例が認められている。その代表が、かの「行ケイ」「猛バイ」等の形である。故に、彼土では、喉内鼻音韻尾を有するその他の通撰・江撰・曾撰では、それをばなお依然として保持する。この事はまた、そのチベット資料の一たる『開蒙要訓』の直音注にて歴然と証されるものとなつて位である。即ち、其処にて、異撰相通の顯著な姿を見せるものの一に、その梗撰と蟹撰とのそれは存するけれども（別に、止撰との混淆も一例ある）、他の陽類には絶えてさる事態は生じていない。この一事で以てしても、その梗撰の特別の弱化が判然と窺えるのである。それを少々例示するに（括弧内は韻名、

鯢（齊）―迎（庚） 梯（齊）―聴（青） 提（齊）―亭（青）
犁（齊）―令（青） 憩（祭）―慶（映） 腔（霽）―病（映）

〔清（清）―至（至）〕

斯くの如きである。

然かく、当面の梗撰の弱化、反して、曾撰の非弱化を教示するものには、また他に、漢越語 Sino-Vietnamese

〔王力「漢語史稿」〕—梗攝は nh 曾攝は ng で写す—があり、更に、ブラフミ Brahmi (水谷真成—ブラフミ文字転写「羅什訳金剛經」の漢字音—名大文学部10周年記念論集) もあるのである。それが、中原音韻にまで至れば、この両者は全く混合し、新たに、庚青韻を構成する事になる。溯るに、上古では、却って、この両者の距離は相遠かりしものであったのである。その際には、曾攝の方が梗攝の方に併入した。因みに言えば、その辺りで梗攝の開口2等の牙喉音字は、些か齊齒音化する。ために、例えば、「行」は「形」に近付くに至る。これを知れば、この字「行」の新漢音形「ケイ」には幾つかの要素が相重なっている事に想到される訳である。が、それはともかくとして、問題の曾攝、別してはその中の蒸韻に注目するに、彼土原音のあり様は如上である。但し、他方では、その主母音の明確なる前舌母音化、狭母音化と同時に、その韻尾の少々の弱化を示唆する材料が皆無である訳でもなさうなのである。それは、高田(前掲)に依れば、チベット資料の「ḥ陵(道安法師念仏讚)は、ng を n と読んだものであるが、不注意による誤りである」。しかし、「蒸韻と真韻の通用は、別字異文にも、陵—隣—隣—陵の通用が見える」と指摘して、この後者の出所を、敦煌俗文学とするが故にである⁽⁹⁾。とならば、この曾攝は、臻攝と平行関係に入る事となる。しかし、としても、その i ン 形はこれにて明白にこそはなれ、それが、イ段仮名のみにて留まるその事柄は依然として定かならぬのである。されば、茲にて、これには我が方の何等かの因子が絡むとせねばならなくなる。

抑々、この、中古音の5韻攝に共通する鼻音韻尾 ŋ は、こちらにては古来、一般にその直前に位置する母音の性質に依じて、或いはウ、或いはイと置換され来たれるものである。即ち、前者は、後舌母音に続く場合であり、後者は、逆に、前舌母音に先立たれる場合のものである。つまり、これは、その音声学上最も自然なる形なのであって、その音感に依存せる近似音にての再構法である。その鼻音そのものを有せぬ我が国語音としては、これが最上の彼土の音の Japonisierung の果たりしのである⁽¹⁰⁾。さて、当面の曾攝蒸韻は、中古音としては、その主母音は中舌音である〔e〕。これに対する我が字音形は、その前の介者と一つになって、i ヨウ、即ち、才段音形であった。それが、

その中国原音の主母音の変遷の挙げ句、その中古母音は消失するに至るが、さてはそれに應對する我が方のは、従来通りの方式では、*o*ウから*i*イへと転ずるはずである。しかし、この同じイ段音の重複では、その後者の方は、前者の側に吸収され得る。従って、結果的には、それが一つのイ段音で示されもし得る事となる。換言せば、仮令、イ段音一つで表示されたとして、それが常に短音である事を保証するものではなきのである。特には、音の長・短の音韻論的確立以前の時にありては、である。茲に則れば、目下の曾撰の、「イ」「シ」には、音声的にはその長呼形が考え得る事となる。原音で、*i*韻尾失落の事があり得ぬのに、我が「新漢音」で、それが「*i*」のみである、というさる対応のあり方には、後者の方にその長呼形「*i:*」を宛てがうのが最適なるが故にである。斯くして、この両者間には均衡が保ち得るのである。

なおまた別に、これには、鼻音化母音の可能性の方へも思いは馳せ得る。つまり、それは、「*i*」なる形である。しかし、今は、その原音での弱化なき事を最重視して、右の如き考えを提出し、それを採ろうとするのである。その原音のあり様を離れて、唯々我がイ段音仮名のみで考えれば、この後の方のも、蓋然性としては否定し得ぬのであらうけれども。

序でに茲で付言するに、この後間もなく、中原音韻にて一になるはずのその庚青韻—中古の梗撰曾撰—の中で、当面は梗撰字は未だ一つとして「*i*ン」に至り及んでいないのに對して、斯く曾撰字の方で逸早く主母音を*i*に変ずるのには、やはりそれだけの因由があるからである。即ち、それは言を俟つまでもなく、中古音に於ける主母音の性質に左右されるものである。それを凝視しさえすれば、その動向は十分に納得の行くところである。それを左に示し置くに、梗撰庚韻 *üai* 清韻 *üei* 青韻 *üei* $\uparrow \downarrow$ 曾撰蒸韻 *üei* である。

さて、我が「新漢音」に就きての私の最大の関心事たる二点とは、以上の如きものである。斯くして、一は次濁声

母に於けるその *Entnasierung* の極を見、二は曾撰蒸韻に於けるその長呼形 (「イ(イ)」「シ(イ)」) を論定せるのである。茲にても我が *Sino-Japanische* の、彼土の音宛らの投影たる事が確認されて、それは当前たりとは雖も、また却って寧ろいたく感動的でもあるけれども、同時にまた、その *Japonisierung* のあり方にも一層の興味がかき立てられるのである。そして、斯かる面からも、我が国語の特性がまた穿鑿可能となる如くでもある。終りに臨んで、目下、その点に關して一事、録して置くとせば、それは、先にも引用せる、チベット資料の『開蒙要訓』中の直音注にて、異撰間に相亘るものとして注目される今一つのものが、我が方には、当面、その「新漢音」としては皆目反映されておらぬという事である。それは、遇撰—止撰間の相通である。「新漢音」には意外に細かい差異が攝取されているのにも拘らず、である。この通用は、遇—止両韻撰が、やがて中原音韻の魚模韻 (f, e, 及び、支思韻 (i, 齊微韻 (j, iei, uei) に移行するその過程中心にて生起するものである。我が中世唐音では、それらは、i, u, また、i i, u i として顯現するに至るが、茲の「新漢音」では、その如きの動きは嚆氣にだに出だしておらぬ。蓋し、就中にその原音の *ei*, また、*ui* は、こちらに表し難き音であつたが故にであらう。その参考として、あちらの資料の直音を若干引き置くに、それは、

稀(微)	—	虚(魚)	厠(志)	—	楚(語)	頤(之)	—	余(魚)
茹(魚)	—	二(至)	騅(脂)	—	朱(虞)	偽(寘)	—	遇(遇)

の如くである。斯かる点も存する事を付加して、本稿は茲で一先ず閉じる事とする。

註

- (1) 所謂新漢音資料としての「九方便」「五悔」の音読資料について—『鎌倉時代語研究7』所収
- (2) 斯かる数字上の限定は甚だ難しきが、一つの目安として言えは、例えば、法華懺法、例時作法(『大藏經』所収)の兩書に限りては、その異なり字数八百数十字中で、中古漢字音形に則さぬものは、5%を越える事はなさそうなのである。この関

係資料間で、さる異形が出現するのは大体共通して限られており、そして、それらは、全体の比率上からは恐らくまず右の線
 辺りであろうと思われる。この意味で、右は一往示してみても決して無駄にてはなき、と言い得るかも知れぬものである。
 但し、これは、単字にての、機械的な算定に過ぎざるが故に、語熟語としての一々の吟味を経れば、当然、今一段、絞
 れるものとなるは必定である。

(3) (4) 論隋唐長安音和洛陽音の声母系統—語言研究 9 (1986年)

(4) 漢語「鼻—塞」複輔音声母的模式及其流變—音韻学研究 2 (1986年、但し、これは、嚴学君と共同執筆の形を採ってい
 る)

(5) (4) 詳しくは、龔煌城—十二世紀末漢語的西北方言 (声母部分) —史語所集刊 52・1 (1981年)

その他に、尉遲は、中国天台宗が、「陳隋之交、智顗于浙江天台創立」、その後、「唐鑑真初伝天台三部于日本」。そして、
 「我們雖然不能説天台宗誦説仏經 必然依拠浙江天台方言、但台 (台密) 密 (東密) 二宗的仏經音讀、一定有其方言基礎」
 の如くに、その説誦音に、その方言の關係する事を云為すけれども、これは証明の至難なる事柄に属するものである。

(6) 註(1)の論文には、左の3資料が付されている。即ち、石山寺藏不動念誦次第長曆元年点 (1085年)、石山寺藏金記院政期点、
 及び、高山寺藏胎藏界次第承保四年点 (1077年) である。

(7) 高田時雄『敦煌資料による中国語史の研究』

(8) 邵榮芳—敦煌俗文学中的別字異文和唐五代西北方言 (中国語文 21983年 3期)

(9) 茲よりすれば、先に挙げた新漢音の「猛バイ」形は、甚だ特異なるものとなる。因みに—この字の高田に依る西北音の推定
 音は mbai、我が中世唐音はマン。中原音韻ではこの字自体は東鍾韻 (ang) なるも、同類字では、また一音として庚青
 韻 (uen) 形をも有する。漢越語では man である。

補

「漢音」では、未だ、韻尾の④鼻音か、⑤否か、に依ってその頭子音に、鼻音か、濁音かの別がある。

例 ④萌 ヲウ mau 南ナム mamu

⑤木ボク boku 奴ト do

—文学部教授—